

古ジャワ金言集 Sārasamuccaya 訳注研究(5)

安 藤 充

キーワード：古ジャワ、金言、サンスクリット

本誌連載の前4編¹⁾に続き、Sārasamuccaya 第151偈から第200偈に関して、本文でテキスト（サンスクリット偈と古ジャワ語解説）のローマ字転写と日本語訳を提示し、注でテキストの典拠やその異読に関する情報（新知見も含む）を記録し、翻訳や解釈に関わる問題点を指摘していく。

151.

sarvasattveṣu yad dānam ekasattve ca yā dayā /
sarvasattvapradānād dhi dayaikā ca viśiṣyate //

一切生類への布施と一つの命に対する憐憫では、
一切生類への布施よりも一つの憐憫の方が上回る。

apan ikañ dānapuṇya riñ sarwabhāva / lawan māsih apuṇya hurip riñ prāñi sasiki / yan tahlana
gati nika kālih / lēwih tēmēn rakwa bhāra nikañ puṇya hurip riñ prāñi sasiki //

さて生きとし生けるものへの布施の徳行、及び、生ある一つのことを憐んで命を布施する徳行。二つの方法を天秤にかければ、実に、生ある一つのものに命を布施する徳行のほうがより重い²⁾。

152.

na hi prāñāt priyataraṃ loke kiñcana vidyate /
tasmād dayāṃ naraḥ kuryād yathātmani tathā pare³⁾ //

実に生命よりも愛しいものはこの世にはない。それゆえ人は自身を慈しむのと同様に他者に憐れみをかけるべきである。

apan⁴⁾ tan hana lēwiha sañke prāṇa nāranya / ŋhiñ hurip mūlya riñ triloka / matañyan māsiha juga ŋwañ / sāsih niñ wwañ⁵⁾ māwak / mañkana asiha niñ wwañ riñ len //

生命よりも優れたものはないと言われる。三界において命はかけがえのないものである。だからまず自分自身を愛しなさい。(そして) 生けるものすべてに愛情を注ぎなさい。そのようにして、ほかの人を慈しみなさい。

153.

akrodhanaḥ satyavādī bhūtanām avihimsakaḥ /
anasūyaḥ sadācāro dīrgham āyur avāpnuyāt⁶⁾ //

怒らず、真実を語り、命あるものに害を与えず、
不平を言わず、善き行いをする者は、長寿を得ることになる。

hana mañke kramanya / tan kataman krodha / apagēh riñ kasatyan / tātan pamātīmāti
/ tan doṣagrāhī / tuwi śuddhācāra / samañkana krama nira / kadīrghāyūṣan pinañguh nira dlāha /
adyāpi mañke tuwi //

さて次のように述べられる。怒りに左右されず、真実に対して忠実であり、他を害することなく⁷⁾、喧しく粗探しをせず⁸⁾、清らかな行いをする。そのような人は将来、いや今すぐに、長寿を得る。

154.

dauṣkulā vyādhibahulā durācārāḥ prahāriṇaḥ /
bhavanty alpāyūṣaḥ pāpā roduka kaśmalodayāt⁹⁾ //

生まれ卑しく、病気がちで、悪行をなし、人を襲う
悪人の寿命は儂い。

kunēñ tikañ wwañ mañke kramanya / mañjanma riñ wwañ kaśmala / wyādhi ta ya / durācāra /
hiñsāprawṛtti / alpāyūṣa / dumeh ya mañkana / krūrakarma ŋūni riñ pūrwanmanya kaliña nikā //

さて、こんな人がいる。卑しい人のもとに生まれ、病気持ちで、素行悪く、人を害する¹⁰⁾。(このような人は) 寿命が短い。理由はこうである。前世で残忍な行いをしたからと言われる。

155.

ye dhanāny apakarṣanti narāḥ svabalam āśrītāḥ /
na hared¹¹⁾ dharmakāmaṃ ca pramuṣanti na saṃśayaḥ¹²⁾ //

自らの力に頼って財を奪い取る者たちは、

(財を) 奪い、法や欲望をまた盗むことは疑いない。

yapwan mañke krama nikañ wwañ / añalap mās niñ mamās / makapañhaḍa kaśaktinya / kweh niñ hambanya / tātan mās nika juga inalap nika / apa pwa dharma / artha / kāma / nika milu kālap de nika //

このような人がいたとする。(自らの) 力と大勢の従者に依拠して、財ある人の財を奪う。彼によって財のみが奪われたのではない。というのも、法や実利や愛欲も含めて奪われたのである¹³⁾。

156.

aharan kasyacid dravyaṃ yo naraḥ sukham āvaset /
sarvataḥ śaṅkitaḥ steno mṛgo grāmam ivāgataḥ¹⁴⁾ //

誰の財も奪わない人は安楽に過ごす。盗人は四方八方を疑う。あたかも村に入り込んだ鹿のように。

kunañ ika wwañ tapwan hana pwa inalapnya / dṛbya niñ asiñ-asiñ / ya ika wastu niñ tan hana katakutnya / līlasiñ saparanya / kunañ ikañ maliñ ñaranya / sakwanya n¹⁵⁾ sarwasañśaya¹⁶⁾ iriya / nihan paḍanya kadi krama niñ mṛga mara riñ grāma //

他方、だれの財産も奪わない人は、何事も恐ることはなく、どこにいても安らかである。しかし盗人と呼ばれる者は、どこにいてもすべてに疑心暗鬼である。それはあたかも人里に入り込んだ獣のようである。

157.

trīṇy eva dhanāny āhuḥ puruṣasyottamavratāḥ /
na druhyāc caiva dadyāc ca satyaṃ caiva sadā vadet¹⁷⁾ //

三つの財こそ、人間の最上の誓いである。

ひとを傷つけず、布施をし、そして常に真実を語るべし。

tēlu tikañ prasiddha dṛbya / mās mañik ñaranya / liñ sañ pañḍita / pratyekanya / si tan mahyun mamāty-amātyani/ si tan drohi / si mujarakēna ñ satya / nahan tañ dṛbya wastu niñ mūlya / liñ sañ mahāpuruṣa //

周知のごとく三つの財というものがある。(財とは) 金や宝石と言われるもの(に等しい)。(このように) 賢者は語る。(三つの) それぞれを言えば、人を殺めたいと思わないこと、ひとを裏切らないこと、(そして) 真実を語ることである。これらは価値のある財物である。このように聖者は語る。

158.

duḥkhine bandhuvargāya suhr̥de saṃśritāya ca /
yā nābhidruhyatā¹⁸⁾ vṛttiḥ sā kṛpātigarīyasī //

苦しんでいる親族に、また頼ってきた友に、
害を加えず、思いやる行為、それは極めて価値の高いものである。

apan ikañ ulah manulūn riñ kadañwarga / katēkan lara prihati / yan iñ mitra kunēñ / an riñ
mamarāśraya / ya ika kṛpā ñaranya / wēkas niñ inuttama ika //

苦しみ落ち込む親族、あるいは頼ってやってきた友人を助ける行為、それは共感と言わ
れる、しかも極上の（共感である）。

159.

paradārā na gantavyāḥ sarvavarṇeṣu karhicit /
na hīdṛśam anāyūṣyaṃ yathānyastrīñiṣevaṇam¹⁹⁾ //

いかなる種族であれ、決して人妻を追い求めてはならない。
人妻に入れ込むような人で長寿の人はいない。

ikañ kaparadārān / sarwadāya ni tan ulahakēna ika / haywa anulahakēñ asiñ amuhara alpāyūṣa //
次は姦淫について。それをしないことがすべてである。決して行為に至ってはならない。
何人であれ、寿命を縮めることになる。

160.

tat prājñena vinītena jñānavijñānavedinā /
nāyuskāmena sevyaḥ syur manasāpi parastrīyaḥ²⁰⁾ //

それゆえ、賢く、慎み深く、知識と分別があり、
長生きしたいと思う者は、たとえ心でさえも、人妻を弄んではならない。

ya ta matañnya / sañ prājña / sañ suśīla / sañ wruh riñ parijñāna / sañ ahyun dīrghyāyūṣa / tar
lamba-lambān²¹⁾ juga sira / mañēn-añēna ñ kaparadārān //

したがって、賢明で、行い正しく、博学で、長寿を願う人は、不義を思い描くような心
の隙があってはならない。

161.

tad eva saṃsparśasukhaṃ saiva cānte viḍambanā /

svāsu cānyāsu ca strīṣu parastrīṣv atha ko guṇāḥ //

自分の妻でも人妻でも、人肌に触れる喜びはあっても結局は戯れ事。
人妻を追って何の益があるうか。

lawan ta wih ikañ sukha niñ aharas mwañ strī ni nwañ / yan tah katēmu irikañ parastrī / tan pahi
wih denyāgawe wañcana tah / mañkana riñ awasāna wisih / yaya tah niyata nika tan pahi /
mañkana pwa ya / apa ta phala niñ parastrī n keñinakēna //

また、自分の妻との触れ合いは快樂だが、たとえ人妻を手の内にしたとして、騙し事と
変わらない。そうして結局は（自分の妻と人妻と）違いはないことが明らかになる。だ
から、人妻を手に入れようと思ってどんな結果になるというのか。

162.

tasmād vākkāyacittais tu nācared aśubhaṃ naraḥ /
śubhāśubhaṃ hyācarati tasya tasyāśnute phalam²²⁾ //

それゆえ、人は言葉と体と心いづれによっても汚れた行いをすべきではない。
正邪の行為をおこなえば、それぞれの結果を得ることになる。

matañnya nihan kadāyakēna niñ wwañ / tan wāk / kāya / manah / kawarjanā / makolaha ñ
aśubhakarma / apan ikañ wwañ mulahakēna ikañ hayu / hayu tinēmunya / mapwan hala
pinakolahnya / hala tinēmunya //

したがって、人は次のような行動をとるべきである。言葉でも体でも心でも、邪悪な行
為をしないようにすべきである。なぜなら、よいことをすればよいことが得られるし、
悪いことをすれば悪いことが起こるからである。

163.

adrohaḥ sarvabhuteṣu kāyena manasā girā /
anugrahaś ca dānaṃ ca śīlam etad vidur budhāḥ²³⁾ //

体と心と言葉いづれによっても、一切生類に対して悪をなさず、
思いやり、物を与えること、賢者はそれが正しい行いと見る。

ikañ kapātyan iñ sarvabhāva / haywa jugēnulahakēn / makasādhana ñ trikāya / nāñ kāya / wāk /
manah / kunañ prihēn ya riñ trikāya / anugraha lawan dāna juga / apan ya ika śīla naranya / liñ
sañ pañḍita //

三つの身体（的行動）、すなわち、身体と言葉と心生きとし生けるものを殺めることは
してはならない。また、三つの身体で、親切と布施に努めるべきである。というのも、

それが正しい行為²⁴⁾と言われる、と賢者が説いているからである。

164.

dharmaḥ satyaṃ tathā vṛttaṃ balaṃ śrīr caiva pañcamaḥ /

niścayena mahārāja sadā nāsty atra saṃśayaḥ²⁵⁾ //

正義、真実、徳行²⁶⁾、力、そして第五に富。

すぐれた王よ、これらが確かに常にある。それには疑いがない。

apan ikañ dharma / satya / maryādāyukti / kaśaktin / śrī / kinaniścayan ika / śīla hetunya n hana //

さて、正義、真実、正しい行い²⁷⁾、力、富。これらは確かなものであって、それらがあるのは正しい行いがあるからである²⁸⁾。

165.

śīlena hi trayo lokāḥ śakyā jetuṃ na saṃśayaḥ /

na hi kiñcid asādhyam vai loka śīlena niścitaḥ²⁹⁾ //

正しい行いで三界を制することができることは疑いない。

この世で正しい行いによって制することができないものは何もないのは確かなこと。

apan ikiñ tribhuwana tuwi / kinaniścayakēn ikā n alaha / kakawaśa wih / de nika sañ apagēh riñ

śīla yukti³⁰⁾ / apan tan hana tan katēkan de nika sañ suśīla //

実にこの三界は、正しい行為に忠実な人によって確実に打ち負かされ支配される。なぜなら、行い正しき人が手に入れられないものはないからである。

166.

śīlam pradhānam puruṣe tad yasyeha praṇāśyati /

na tasya jīvitenaṛtho duḥśīlam kiṃ prayojanam³¹⁾ //

正しい行いは人間にとって最も重要である。この世でその人からそれがなくなれば、その人の人生に何の意味があろうか。悪行が何の役に立とうか。

śīla kētikañ pradhāna riñ dadi wwañ / hana prawṛtti niñ dadi wwañ duśśīla / aparana ta prayojana

nika riñ hurip / riñ wibhawa / riñ kaprajñān / apan wyartha ika kabeh / yan tan hana śīla yukti³²⁾ //

正しい行いは人として生まれた者にとって最も重要である。もし人に生まれてその行いが邪悪であれば、その人の命や富や知恵には何の目標があろうか³³⁾。というのも、もし正しい行為というものがなければ、それらはすべて無意味である。

167.

jyāyāmsam api śīlena vihīnaṃ naiva pūjyet /
api śūdraṃ tu dharmajñāṃ sadvṛttaṃ cāpi pūjyet³⁴⁾ //

目上であっても、正しい行いをしない人は敬うことはない。
シュードラであれ、正義を知り行い正しき者は、敬うべきである。

yadyapi brāhmaṇa tuha tuwi / yan duśśīla / tan yogya katwēnana / mon śūdra tuwi / yan dharmika
/ suśīla / pūjān katwañana jugēka / liñ sañ hyañ aji //

バラモンであっても³⁵⁾、悪行をなすものは敬うに値しない。たとえシュードラであつても、正義に従い、行い正しければ、崇敬する、(つまり) 敬う³⁶⁾べきである。(このように) 聖典は説く。

168.

vṛttena rakṣyate dharmo vidyā yogena rakṣyate /
mrjajā rakṣyate rūpaṃ kulaṃ śīlena rakṣyate³⁷⁾ //

正義は徳行により守られる。学問は専心によって守られる。
美貌は清潔により守られる。家は正しき行いにより守られる。

prawṛtti rahayu kēta sādhana niñ rumakṣa ṅ dharma / yapwan sañ hyañ aji / jñānāpagēh³⁸⁾
ekatāna sādhana ri karakṣan ira / kunañ ikañ rūpa / si radin pañrakṣa irika / yapwan kasujanman /
kasuśīlan sādhana niñ rumakṣa ika //

すばらしい振る舞いこそ、正義を守る手段である。聖なる教えは、常に専心あつての知識³⁹⁾を手段に守られる。美しさは清らかさが守ってくれる。家柄の良さは正しい行いがそれを守る手段である。

169.

ātmānam ākhyāti kulī na yo naraḥ⁴⁰⁾ svaśīlacāritrakṛtaiḥ śubhodayaiḥ //
praṇaṣtam apy ātmakulaṃ tathā naraḥ punaḥ prakāśaṃ kurute svaśīlataḥ⁴¹⁾ //

人は自らの正しい行いや振る舞いによる良い結果で自らのことを語る。
たとえ実家が没落していても、自らの正しい行いで再び輝きを与える。

ulah rahayu mara hetu nikañ wwañ kinawruhan kasujanmanya / yadyapin hilaña kēta ṅ
kawwañan / yan suśīla ikañ wwañ / ndān kinawruhan muwah kawwañan ika //

よき行いはよき生まれだとわかる原因となる。たとえ良き家柄が廃れたとしても、その

人の行いがよければ、再び家柄の良さがわかるようになる。

170.

sarve ca vedāḥ saha ṣaḍbhir aṅgaiḥ sāṅkhyam purāṇam ca kule ca janma /

sarvāṇi naitāni gatir bhavanti śīlavapyetasya narasya rājan⁴²⁾ //

六つの補助学を含むヴェーダ学、サーンキヤ、プラーナ、そして良き家への生まれ。
正しい行いなき者には、これらすべてがそなわらない。

apan sañ hyañ caturveda saha ṣaḍaṅgōpāṅga nira / sañ hyañ sāñhya / sañ hyañ purāṇa / lawan ika
kasujanman ikañ kula kunēñ / ika ta kabeh / tan katēmu phala ni de niñ kaduśśīlan / kaliñanya /
wyartha wruhnya aṅaji lawan kasujanmanya //

さて、六つの正副の補助学⁴³⁾を含む四つのウェーダ学、サーンキヤ、プラーナ、そして
良き生まれ、これらすべては悪しき行いをする者には結果として得られることがない、
と説かれている。聖典を学んだ知識も家柄の良さも（正しい行いをしなければ）無益で
ある。

171.

na bāndhavā na ca vittaṃ na vidyā na ca śrutam na ca mantrā na vīryam /

duḥkhāt trātum sarva evotsahante paratra śīlena⁴⁴⁾ tu tatra loke⁴⁵⁾ //

親族、富、学問、聖典、真言、武勇。

どれも苦から救うことはできない。来世では正しい行いによるしかない。

lawan ta waneh / tar wēnañ ikañ kadañ kulagotra matuluñ mañēntasakēñ / sañke kaprihati /
mañkana ñ mās salwir niñ drwya / mañkana ñ kasujanman / mañkana ñ aji / mañkana ñ sañ hyañ
mantra / mañkana ñ wīrya / tan wēnañ jugēka manuluñ / kunēñ wēnañ manuluñ / kasuśīlan juga /
apan prasiddha wēnañ maḍēm⁴⁶⁾ iñ duḥkha riñ paraloka dēlāha //

また他にこう説かれる。家族も親族も苦悩から救い出すのを手伝うことはできない。金
もいかなる財宝も、生まれの良さも、聖典も、真言も、武勇も、同じく助けにはならな
い。正しい行いのみが（苦悩から救う）助けになり得る。なぜならば、よく知られるよ
うに、（正しい行いは）来世における苦しみを減するからである。

172.

yo lokam anugrṇhāti daridram dīnamānasam /

sa putrapaśubhir vṛddhiṃ yaśaś cākṣayam aśnute⁴⁷⁾ //

貧しく心痛める世の人に恵みを与える者は

子孫や家畜が増え、不滅の名声を得る。

hana ta wwañ mañke kramanya / maweh anugraha / masukha agawe bodhana / riñ wwañ daridra / enak ta ya manahnya / ika ta wwañ mañkana / wr̥ddhi hanaknya / putunya / wēka wetnya tēkēñ wēñañ-wēñannya / lawan kocapan i lēkasnya riñ hayu //

次のようなことをする人がいるとする。哀れな人に施しを与え、啓蒙する⁴⁸⁾のを喜びとする。するとその(施しをうけた)人は幸せに思う。こういう(恵みを与える)人は、子や孫、家畜までも繁栄する。そしてそのよき行いが語り草になる。

173.

amitram api yo dīnaṃ śaraṇaiṣinam āgamam /
vyasaneṣv anugr̥hñāti sa vai puruṣa ucyate⁴⁹⁾ //

敵であれ、惨めな状態にあって庇護を求めてやってきた者に、苦境において恵みを与える者は、優れた人⁵⁰⁾と言われる。

len sañkērika / hana ya mañke kramanya / musuknya towi / salwir niñ makira-kira riñ hala / dīna alara katēkan prihati / mara ta ya maminta śaraṇa iriya / tinuluñnya ta ya / ikañ mañkana kramanya / ya ika puruṣasattama naranya / tuhu sajjana wiṣeṣa niñ wwañ //

ほかに例えとしてこのようなことがある。(いつもは)自分の敵で危害を加えようとばかりしているものが、落ちぶれ苦しみ痛みをかかえて自分に庇護を求めてきて、その敵を助けてやるとする。そうすれば、人は最も優れた人と呼ばれる。実に徳高く、傑出した人である⁵¹⁾。

174.

sārthaḥ pravāsato mitraṃ bhāryā mitraṃ gr̥he sataḥ /
āturasya bhīṣaṇ mitraṃ dānaṃ mitraṃ mariṣyataḥ⁵²⁾ //

国を離れた旅人には隊商が友、家にいる男には妻が友、病人には医者(が)友、死に近い者には布施(が)友。

nyañ riñci niñ mitra naranya / nyañ adagañ / vañija / bañyāga / yeki mitra niñ wwañ mañlampuran / apasah apadohan / kunañ mitra sañ gr̥hastha / strī nira ika / yapwan wwañ alara / walyan / mami-mami mitra nika / kunañ ikañ wwañ meh mātya / dānapuñya mitra nika //

さて友というものについて詳しく述べれば、商売人、隊商が、旅をして(家族から)遠く離れている旅人の友である。他方、家住まいの者の友は妻である。苦しむ者がいれば、医者⁵³⁾が友である。また、瀕死の者には徳行としての布施(が)友である。

175.

na mātā na pitā kiñcit kasyacit pratipadyate /
dānapathyodano jantuḥ svakarmaphalam āsnute⁵⁴⁾ //

父親も母親も、誰かの何かを受けるわけではない。
人は布施を（人生の）旅の兵糧とする⁵⁵⁾。自らの行為の結果を享受するのだ。

ika tañ dāna / tan bapa / tan ibu / umukti phala nika / añhiñ ikañ wwañ gumawayakēn ikañ
dānapuṇya / ya juga umukti phala nikañ dānapuṇya //

布施については、父親も母親も、その結果を享受するものではない。布施の徳行を行ったもののみ、その徳高き布施の果を享受するのである⁵⁶⁾。

176.

amātsaryaṃ budhāḥ prāhur dānaṃ dharme ca saṃyamam /
avasthiteṇa nityaṃ hi tyāge tv āsādyate śubham⁵⁷⁾ //

布施、および正義に専心することは私欲なきことと言う。
確固として常に（そうあれば）、捨離の境地でよきことが得られる。

nihan tañ dāna liñ sañ pañḍita / ikañ si haywa kimburu / ikañ si jēñek ri kagawayan iñ
dharmaśādhana / apan yan lañgēñ ika / nitya katēmwan iñ hayu / paḍa lawan phala niñ tyāgadāna
//

布施について賢者はこう説く。私欲があってはならない。徳行は気持ちよくおこなうべきである。なぜなら、いつもそうであれば、必ずよきことが得られるからである。それは、私財をなげうつ布施⁵⁸⁾の成果に等しい。

177.

dānena bhogī bhavati medhāvī vṛddhasevayā /
ahiṃsayā ca dīrghāyur iti prāhur manīṣiṇaḥ⁵⁹⁾ //

ひとは布施により享受するもの多く、年寄りを敬って知恵を得、
不殺生で長寿に恵まれる、と賢者は言う。

kunañ phala niñ tyāgadāna / yāwat katēmu ñ bhogōpabhoga riñ paraloka dēlāha / yapwan phala
niñ sewaka riñ wwañ kabayan / katēmu ñ medhāguṇa / si yatnān kitātutur / kunēñ phala niñ
ahiñsā / si tan pamāti-māti / kadīrghyāyusañ / mañkana liñ sañ pañḍita //

私財をなげうつ成果とはといえば、やがて来世で⁶⁰⁾ありとあらゆる幸せを享受する。老人

の世話をする成果は、知恵というすぐれたものを得ることである。(だから) 年寄りは大事にしなさい。不殺生、つまり(生き物を) 殺さない成果は長寿である。このように賢者は説く。

178.

na dānād duṣkarataraṃ triṣu lokeṣu vidyate /
arthe hi mahatī tṛṣṇā sa ca kṛcchreṇa labhyate⁶¹⁾ //

三界において布施ほど行うのが難しいことはない。
欲しくてたまらないものは苦勞しても手に入れる。

apan riñ tribhuwana / tan hana mewēh kagawayanya / lena sanke dāna / agōñ wi kañ tṛṣṇā riñ
artha / apan ulih niñ kasakitan ikañ artha katēmu //

三界において、布施ほど行い難いものはない。物に対する貪欲は大きい。痛みを伴う行為で(も、欲しい)物を手に入れる。

179.

duṣkaraṃ bata kurvanti mahato 'rthāṃs tyajanti ye /
vayam eṭān parityaktum asato 'pi na śaknumaḥ⁶²⁾ //

莫大な富をなげうつ人は本当になし難いことをされる。
私どもは持ってもいない富でさえなげうつことができない。

āścarya mata sañhulun ri sañ wēnañ tumiṅgalakēñ kweh niñ dṛbya nira / prasiddha mulahakēñ iñ
duṣkara ṅaran ira / hetu niñ mañkana / nora paran ri kami / ndātan wēnañ juga kami
tumiṅgalakēñ ikañ tan hana ri kami / tan pahuwusan tṛṣṇā añayam-ayam⁶³⁾ kaliñanya //

自分のような者には、多くの財をなげうつことができる人は驚きである。実に行うのがむずかしいことをされると言われる。その理由はこうだ。私たちには何もない。私たちにないものをなげうつことができない。渴愛、(すなわち)常に何かを欲する思いは止むことがない、と説かれる。

180.

arthavān artham arthibhyo na dadāty atra ko guṇaḥ /
ekaiva gatiṛ arthasya dānam anyā vipattayah⁶⁴⁾ //

富ある者が乞い求める者に財を与えないで、何の益があろうか。
財の赴くべき道はただ一つ、布施である。それ以外は災厄にいたる。

kunēñ / an kwa ñ ujar⁶⁵⁾ sañ sugih maweh dāna riñ kāsy-asih / tan padon ika / apan kewala tuñgal don in mās / dānākēna juga karih / len sañkêrika donya / lara katiwasēñ naran ika //

さて、このようなことが言われる。裕福な者が憐れな者に施しをするとして、それには何の利益もない⁶⁶⁾。なぜなら、富の唯一の目標は与えることだからである。それ以外では、痛みや悲しみに至る、と言われる。

181.

dhanāni jīvitam caiva parārthe prājña utsrjet //
sannimittam varam tyāgo vināśe niyate sati⁶⁷⁾ //

人は賢明であれば、他者のために財も命もなげうつべきである。
滅びること必至であるゆえ、喜捨が正しい行動の根本となる。

mañke mara de sañ enak wruh nira / tar tinēñēt nira mās nira / hurip nira tuwi / yan pakaphala ñ kaparamārthan⁶⁸⁾ / wruh wi sira riñ niyata niñ pāti mwañ ri tan hana niñ wastu lañgēñ / matañnyan lēhēñ ikañ wināśa makaphala ñ kaparamārthan⁶⁹⁾ //

物事をよく知る人の行動はこうあるべきである。究極の善が果を結ぶように、自らの富や命を惜しんではならない。死は必定であり、永遠に存在するものはない、と知るがゆえに、(自らの富や命を)捨てることで、究極の善が実を結ぶようにするのが好ましい⁷⁰⁾。

182.

dadadhvam bhuñjata bhṛśam mā bhūta kṛpañā janāh /
karmakṣayeña kṣīyante nopabhogena sañcayāh⁷¹⁾ //

人に与えよ。(自らも)とことん楽しめ。吝嗇ではいけない。
蓄えは無為によって減滅する。享樂によってではない。

matañnya deya nikañ wwañ / haywa juga tēñēt / maweweha gawaya dānapuñya / mamuktya / apan tan hēnti ikañ wibhawa / yan tan hēnti ikañ karmaphala humanākēnya //

だから人はこのようにすべきである。出し惜しみはすべきではない。施しをして布施の徳行をおこなうべきだ。(また、自分も)楽しみなさい。なぜなら、行為の結果が途絶えなければ、豊かさは尽きることがないから。

183.

agnihotraphalā vedā dattabhuktaphalam dhanam /
ratiputraphalā nārī śīlavṛttaphalam śrutam⁷²⁾ //

ヴェーダは火神への供養を結果とする。布施は与えることと楽しむことを結果とする。妻は快樂を与え子供を授かることを結果とする。聖典は正しい行為や振る舞いを結果とする。

nihan pājara mami / phala sañ hyañ weda n inaji / kapūjān sañ hyañ śiwāgni / rapwan wruh riñ
mantra / yajñānga widhiwidhānādi / kunañ don in dhanam hinanākēn / bhuktin dānākēna /
yapwan don in anakēbi / dadya niñ āliṅganādikrīḍā⁷³⁾ maputraputrīsantāna / kunēñ phala sañ
hyañ aji n⁷⁴⁾ kinawruhan / haywan in śīla mwan ācāra / śīla naran in swabhāwa / ācāra naran in
prawṛtti kawarah riñ aji //

私はこのように言うておく。ウェーダを学ぶ成果は、シワ神や火神への供養である。祈祷の聖言や儀式、儀式の執行についての知識を得るからである。財を形成する目的は、楽しみを味わい、施しをすることである。妻を得る理由は、抱擁などの愛戯をし、息子や娘の後継ぎに恵まれるためである。聖典に精通する成果は、品行方正である。品行の品とは自らの性質、行とは行動であると、聖典に述べられる⁷⁵⁾。

184.

dhanena kiṃ yan na dadāti nāśnute balena kiṃ yena ripūn na bādhatē /
śrutena kiṃ yena na dharmam ācāret kim ātmanā yo na jitendriyo vaśī⁷⁶⁾ //

与えず楽しまずして、財産に何の価値があろうか。敵を阻止せずして、武力に何の価値があろうか。正義を行わずして、聖典に何の価値があろうか。感覚器官を調御し自制することがなければ、自我に何の価値があろうか。

ndya kari don in dhana / yan tan dānākēna / tan bhuktin / mañkana n kaśaktin / tan padon ika ya
tan sādhanā niñ mañalahakēna n musuh / mañkana n aji / tan padon ika yan tan suluha riñ
dharmaśādhanā / mañkana n buddhi kaprajñān / tan padon ika yan tan pañalahakēnēndriya / tan
pañawaśākēna n rajah tamah //

もし与えられなかったり楽しみを享受されなかったりしたら、財に何の益があろうか。同様に、敵を倒す手段にならなければ、力に何の益があろうか。同じく、正義の実践における灯明とならなければ、聖典に何の益があろうか。同じく、感覚器官を制し、激情や心の闇を制することがなければ、理性や知識⁷⁷⁾に何の益があろうか。

185.

yasya pradānavandhyāni dhanāny āyānti yānti ca /
sa lohakārabhastreva śvasann api na jīvati⁷⁸⁾ //

財産の出入りはあっても施し与えることのない人は、

鍛冶屋の吹子のように、空気の出入りはあっても生きているのではない。

kunañ ikañ wwañ lunhā tēkā māśnya / tan pakahetu ñ dāna / ya ika māti ñaranya / tuhun
māmbēkan / bhedanya sañkēñ wañke / tan pahi lawan ububan in pañde wēsi⁷⁹⁾ //

その人の財産が失われたとしても、施し与えたことが理由でなければ、彼は死んでも同然と言われる。呼吸はしても、死体との違いはあるのか⁸⁰⁾。鍛冶職人の吹子と同じである。

186.

dānaṃ hi bhūtābhayadakṣiṇāyāḥ sarvāṇi dānāny adhiṭiṣṭhātīha /
tīkṣṇāṃ taṇuṃ yaḥ prathamam jahāti so 'nantam āpnoty abhayaṃ prajābhyah⁸¹⁾ //

生きとし生けるものに安心という贈り物を恵むことは、あらゆる布施を凌駕する。
鋭い体⁸²⁾を最初に捨てる人は、生きとし生けるもののために安心を獲得する。

hana ta abhayadāna ñaranya / lwih sañke sarwadāna / mahīdānādi / kramanya / abhaya / taya niñ
takut / dāna / ya ta winchakēnya / riñ sarwabhāwa / tan pagawe takut niñ sarwabhāwa kaliñanya /
ikañ wwañ mañkana kramanya / ya ika tan kataman bhayān hanēñ rāt / amoghāsīh awēlas
anukūla bhakti ikañ sarwabhāwa iriya dēlāha //

安心の布施というものは土地の寄進などのあらゆる布施よりもすぐれている。ひとつずつ説明するところである。安心とは恐れがないことである。布施とは一切生類に施されるということである。生きとし生けるものを怯えさせないということである。人がこのようにすれば、恐怖に襲われる人はこの世にだれもいなくなる。その結果、将来、命あるものはみな慈しみと憐れみの心をもち、謙虚で信心深くなるだろう。

187.

deśakālāgamakṣetradravayadātṛmanoguṇāḥ /
sukṛtasyāpi dānasya phalātīśayahetavaḥ⁸³⁾ //

施しをする場所、時機、聖典の教え⁸⁴⁾、施しの受け手、施しの物、施しをする者の心性。これらが、布施が大成功⁸⁵⁾という結果となる要因となる。

samañke amuhara gōñ niñ dānaphala / pratyekanya / deśa / kāla / āgama / kṣetra / dṛbya / dātā /
manah / hayun ika kabeh / yatika amañun bhāra niñ dānaphala / deśa ñaran in bhūbhāga / anuñ
raywa śucya tikañ bhūbhāga / deśa pawehana dāna / kāla ñaran in śubhakāla / nā ñ uttarāyañādi /
āgama ñaranya warah sañ hyañ aji / anuñ tumasakakēñ i warah sañ hyañ āgama / tah kramanya /
kṣetra ñaran sañ wehana dāna / anuñ sulakṣaṇa supātra ta sira / dṛbya ikañ wastu dānakēna / anuñ

uttama ta ya / dātā naran saṃ masuñ dāna / sañ yajamāna / magawe dāna / manah / buddhi sañ yajamāna / śraddhā lwā ta ya / makanimitta atisaya niñ dānaphala / hetunyan paněmu n hayu //

次のようにして布施の果実は大きく実ることになる。一つずつ挙げれば、場所、時、聖典、畑、もの、施主、心。これらすべてがよければ、大きな布施の果実が生まれる。場所とは、地域のことで、その地域が美しく清らかであれば、そこが布施を行うべき場所である。時とは、縁起のよい時ということで、例えば太陽北行の時など（が布施に適している）。聖典とは経典の教えのことで、聖典の教義に熟達すべきである。そうすれば同様なことになる。畑とは、布施を受ける人のことで、気立てよく、ふさわしい受け皿であらねばならない。ものとは、施される物のことで、最上のものでなければならぬ。施主とは施しをする人のこと、供養し布施をする人である。心とは供養者の気持ちで、優しく、寛容でなければならぬ。これらは布施の果実が大きく実る原因となり、その結果、幸福を得ることになる。

188.

dvāv imau puruṣavyāghra svargasyopari tiṣṭhataḥ /
durbhikṣe cānnadātā ca subhikṣe ca hiranyadaḥ⁸⁶⁾ //

人中の虎のような方よ、二種の者が天上の高みにそびえたつ。
不作のときに食べ物を実施者と、豊作のときに金を与える者である。

lawan ta waneḥ / ikañ wwañ mapuṇya sēkul / ri kāla niñ durbhikṣa / mwañ hana ta mapuṇya mās / ri kāla niñ subhikṣa / ika ta kālih / paḍa ya ta rakwēka muṅgu in ruhur niñ swarga dēlāha //

また他にこう説かれる。不作のときにご飯を施す徳行をする者、そして豊作のときに金を施す徳行をする者、この両者はいずれも、やがて天界の極みに暮らす。

189.

ayaneṣu ca yad dattaṃ ṣaḍaṣītimukheṣu ca /
candrasūryoparāge ca viṣuve ca tad akṣayam⁸⁷⁾ //

太陽が至点にあるとき、八十六に入った⁸⁸⁾とき、日蝕・月蝕のとき、太陽が昼夜平分点にあるときになされた布施は不減である。

nyañ śubhakāla / pratyekanya / hana dakṣiṇāyana nāranya / tambe sañ hyañ ādityāñidul / hana uttarāyana nāranya / tambe sañ hyañ ādityāñalor / hana ṣaḍaṣītimukha nāranya / somagraha / sūryagraha / wiṣuwakāla kunañ / ikañ wastu dānākēna ri kāla samañkana / atisaya rakwa bhāra ni phala nika //

さて（布施をするのに）縁起がよいときを列挙していく。南行、すなわち、太陽が南に

向かう初日。北行、すなわち太陽が北に向かう初日。八十六に入ったといわれる⁸⁹⁾(とき)、月蝕、日蝕、そして春分・秋分。これらのときにものを施すのがよい。その果実はきわめて重くなるだろう。

190.

prāṇasantāpanirviṣṭāḥ kākiṇyo 'pi mahāphalāḥ /
anyāyopajitā dattā na parārthe sahasraśaḥ⁹⁰⁾ //

命を焦がして得られたものは、たとえ少額でも大いなる実を結ぶ。
不正に得られたものは、何千と布施をしても相手のためにはならない。

yadyapi akēḍika ikaṅ dāna / ndān mañēne wēlēkaṅ ya / agōṅ phala nika / yadyapin akweh tuwi /
mañke wēlēkaṅ tuwi / yan antuk niṅ anyāya / niṣphala ika / kaliṅanya / tan si kweh / tan si kēḍik
/ amuhara kweh kēḍik niṅ dānaphala / kunēṅ paramārthanya / nyāyānyāya niṅ dāna juga //

たとえ布施が僅かであっても飢えた者⁹¹⁾に届けば、その果実は大きい。たとえ多くのものが同様に飢えた者に(与えられても)、不正な行為の結果であるならば、その布施は虚しい。解説すれば、布施の多寡がその成果の多寡をもたらすのではない。究極の真理からすれば⁹²⁾、布施が適正な行為によるか不正な行為によるかだけである。

191.

arthaṃ dadyān na cāsatsu guṇān brūyān na cātmanaḥ /
ādadyāc ca na sādhubhyo nāsatpuruṣaṃ āśrayet⁹³⁾ //

悪人に財を与えるべきではない。自らの徳を語るべきではない。
聖なる行者から布施を受けるべきではない。悪人を頼るべきではない。

haywa ta maweh dāna riṅ tan sajjana / haywa ta mucap guṇa iṅ awakta / haywa tanaṅgap
dānapuṇya sañke tan sādhu / hawya ta marāśraya riṅ tan sajjana //

よくない人に布施をしてはならない。あなた自身の徳を吹聴してはならない。よくない人⁹⁴⁾から布施を受けてはならない。よくない人に庇護を求めてはならない。

192.

brāhmaṇaś cen na vidyeta śrutavṛttopasaṃhitāḥ /
pratigrahītā dānasya moghaṃ syād dhanināṃ dhanam⁹⁵⁾ //

布施の受け手として、知識と良き振る舞いを身につけたバラモンがいなければ、
長者の富も虚しい。

yan tan hana kēta sañ brāhmaṇa / anuñ śuddhācāra bruh ya ri sañ hyañ aji / sayogyā wehana n
dāna / liñ sañ pañḍita / dadya niṣphala dhana nika sañ dātā / hīnanyan⁹⁶⁾ tan barañ sañ wehana
dāna //

もし、バラモンであって、行いが清らかで聖典に通じ、布施を受けるのにふさわしい人が
いなければ、賢者いわく、施主の富は実を結ばない。結果として、布施を受ける人が
だれもいなければ。

193.

caritraniyatā rājan ye kṛśāḥ kṛśavṛttayaḥ /
arthinaś copagacchanti teṣu dattaṃ mahāphalam⁹⁷⁾ //

王よ、行いを律し、糧少なく、瘦せた者たちが
乞うて来たら、彼らに布施をすれば、実りが大きい。

lwir ni yukti ika wehana dāna / wwañ śuddhācāra / wwañ daridra / tan panēmu āhāra / wwañ
mara aṅgōñ harēp kunēñ / ikañ dāna riñ wwañ mañkana agōñ phala nika //

布施の対象として適切なのはどんな人かといえば、行いが清らかな人、貧しくて食べ物
が手に入らない人、いつも乞い求めて来る人。このような人への布施は、その実りが大
きい。

194.

na dadyād yaśase dānaṃ bhayān nopakāriṇe /
na nṛtagītaśīlebhyo hāsakebhyo na dhārmikaḥ⁹⁸⁾ //

正義を守る人は、名声のために、あるいは恐怖心から、あるいは恩人のために、
また、踊りや歌を生業とする人や道化師に、布施をすべきではない。

deya ni aweha dāna / haywa maprayojana pālēman / haywa de niñ wēdi / haywa maphala
pratyupakāra / haywa riñ bhaṅdagiṇa / mañkana deya sañ dhārmika / maweha mata sira / ndātan
dāna naran ika / weweh dēmakan pratyupakāra naran ika //

布施をする際になすべきことは（こうである。）名声を目的としてはならない。恐怖ゆ
えであってはならない。恩返しとなるものであってはならない。芸人に対して行っては
ならない⁹⁹⁾。正義に忠実な人はこのようにすべきである。布施をしても布施と呼ばれな
い場合、その贈り物は恩返しと呼ばれる。

195.

mātā pitā vā prāṇānāṃ bhavatām arthināu yadi /

tābhyāṃ sampratidātavyās te hi tābhyām upārjitāḥ //

父親や母親がそなたの命を差し出すよう求めるならば、二人から授かった命は二人に返し与えねばならない。

kunēn yan bapa ibunta sira maminta dāna / yadyan huripta towi / suṅakēna juga ri sira / apan sira humanākēn ika //

さて、もしそなたの父母が布施を求め、それがそなたの命であったとしても、それを布施しなければなりません。なぜならば、両親には生きていてもらわなければならないから。

196.

yan mātāpitarau kleśaṃ sahete garbhadhāraṇe /
na tasya niṣkr̥tiḥ śakyā kartuṃ varṣasatair api¹⁰⁰⁾ //

父や母が懐妊中に耐えた苦しみの
お返しは百年かかってもできない。

apayapan agōn ikañ dukkha kabhukti de nira / nūnin hana riñ garbha / sarwadāya hutaṅta ika sakarēn /
yaya tan kawēnañnya n sahurēnta sātus tahun //

なぜならば、かつて（そなたが）胎内にいる間に彼ら（父母）が受けた苦痛は大きく、そのすべてが、現時点でそなたの負債であるからだ。とはいえ、そなたは百年してもそれに報いることができない。

197.

daridrān bhaja kaunteya mā prayaccheśvare dhanam /
vyādhitasyauśadhaṃ pathyaṃ nīrujasya kim auśadhaiḥ¹⁰¹⁾ //

クンティー夫人の子よ、貧しき者に与えよ。主君に財を差し出すことなかれ。
薬草は患う者にふさわしい。健やかな者には薬草は何の益があるうか。

kunēn pwānaku / kamuñ wēka sañ konṭi / daridraha¹⁰²⁾ tikañ wehananta dāna / haywa maweh riñ sugih /
apan riñ wyādhi yogya niñ tambā n wehakēna / kunēn riñ waras / tan papakēna n tambā de nika //

さて我が息子よ、コンティー夫人の子よ。布施は貧しい者にこそ恵むべきである。富める者に施してはならない。なぜなら、病気の人に薬を与えるのは適切だが、健康な人には薬は役に立たない（のと同じだ）から。

198.

ayācataḥ sīdataś ca sarvopāyair niyantavyaḥ /
ānṛśaṃsyaṃ paro dharmo 'yācate yat pradīyate¹⁰³⁾ //

乞い求めずうずくまっている者には、いかなる手段を講じても施しをすべきである。
求めない者に布施がなされれば、それは慈しみであり、究極の道理である。

hana ya wwanḥ daridra / ndātan pamalaku / upāya nika sakāraṇanyan pamalakwa / apān sy
ānṛśaṃsa¹⁰⁴⁾ pwa wiśeṣa niṅ dharma nāranya / yatika katēmu ri kawehan iṅ dāna riṅ amalaku //

貧しい人がいて、それでも乞い求めない場合は、要求するようにあらゆる手立てが必要
である。なぜならば、(そうした者への布施は) 慈悲心であり、極め付けの正義である
といわれるからである。そうして、乞い求める者に対する布施で、与えられたものが
(必要な人に) 届いていく¹⁰⁵⁾。

199.

nāvamanyetābhigataṃ na praṇudyāt kathañcana /
api śvapāke śuni vā na dānaṃ vipraṇaśyati¹⁰⁶⁾ //

やって来る者をぞんざいに扱ったり追い払ったりしてはならない。
カースト外の者、あるいは犬への施しも無駄にはならない。

lawan haywa ta sampe riṅ amalaku dāna / haywa matuṅduṅ / yadyapin riṅ caṅḍāla / śrgāla tuwi /
tan wiphala ikañ dāna irika //

また、物乞いに来る者を蔑んではならない。追い払ってはならない。最下層の民であ
れ、犬であれ、彼らへの布施は実を結ばないことはない。

200.

ahanyahani yācantam ko 'vamanyed guruṃ yathā /
mārjanaṃ darpaṇasyeva yaḥ karoti dine dine¹⁰⁷⁾ //

一体誰が、毎日乞い求めに来てくれる尊き方を侮蔑しようか。
日々、鏡を磨いてくださるお方であるゆえに。

lawan ta waneh / syapa kari sampaya riṅ amalaku dāna / salwir niṅ manasi sāri-sāri / marāṅgōṅ
harēp / tan hana bheda nira lawan guru mājar dharma / sabuka niṅ wai n¹⁰⁸⁾ lot humilañakēn
mala niṅ aweh dāna / kadyaṅga niṅ mañisui crēmin / lot sāri-sāri mañhilañkakēn mala /
mañkana ta sañ manasi //

また他にこのように説かれる。いったい誰が施物を求めて来る人を蔑むだろうか。日をおかずに物乞いにやって来る人はみな、正義を説く先生と何ら違いはない。休むことなく毎日のはじまりに施しをする者の穢れを落としてくれる。あたかも、毎日必ず鏡を洗い流して汚れを落とすように。乞食者とはこのようなお方なのだ。

注

- 1) 安藤 2018; 2019; 2020; 2021。
- 2) サンスクリット偈ではA (主格) がB (奪格) よりすぐれている (viśiṣ) とシンプルだが、古ジャワ解説では、両者を秤にかければ (yan tahlana) Aの方が重い (lēwih bhāra) と、真意を汲んで比喩的な言い回しを使っているのが興味深い。
- 3) Mahābhārata (Poona Critical Edition, Sukthankar and Belvalkar 1933–66, 以後 Mbh) 13.117.11 と完全に一致。
- 4) テキスト校訂者の Raghū Vira は写本が伝える apan の n を取る読みを示唆している。これは直後に tan が来る時に apa tan となることが多いことに倣っていると思われるが、ここでは写本の読みに従っておく。
- 5) Raghū Vira は wañ としているが、意味から読みを修正 (wwan “human being”)。
- 6) Mahāsubhāṣitasamgraha (MSS) 123 は本偈と完全に一致する。他方、Mbh 13.107.14 は前半は同一だが、後半は大意は同じものの表現が異なる。
akrodhanaḥ satyavādī bhūtānām avihimsakaḥ /
anasūyur ajihmaś ca śataṃ varṣāni jīvati //
- 7) 同様な表現が第40偈解説 (tan pamāti-māti)、第157偈解説 (tan ahyun mamatya-matyani) にもあらわれる。
- 8) 同様な表現が第63偈解説 (haywa doṣagrāhi) にみられる。
- 9) d は読みが崩れていて意味をなさないが、Raghū Vira は校訂上の注記を残していない。ここはとりあえず訳出しないでおく。ただし、今回の調査で、本偈とほぼ一致する偈が Mbh に見つかった (Mbh 3.181.20) (下線部は読みが異なる箇所)。
dauṣkulyā vyādhibahulā durātmāno ‘pratāpinaḥ /
bhavanty alpāyusaḥ pāpā raudrakarmaphalodayāḥ // (下線部は引用偈との相違箇所)
引用偈 d の転訛と、raudrakarmaphalodayāḥ (「酷い所業の結果として」) という読みを比べると、本来はこういう読みだったことが推察される。
- 10) Mbh の読み apratāpinaḥ であれば「冴えない」という意味合いになるが、古ジャワ解説は明らかに prahāriṇaḥ (“attacking, fighting against”) に従っている。したがって、古ジャワ解説者が参照したサンスクリット偈は、この箇所については現行 Mbh の読みと異なっていたことがわかる。ただし、Mbh 校訂版で参照された写本に prahāriṇaḥ はないようである。
- 11) Raghū Vira は hared という読み疑問符をつけている (注記なし)。ほかの abd で述語がすべて複数形であるのに、ここだけ 3 人称単数形となっているので、何らかの読みの転訛であるのは確かである。
- 12) Raghū Vira は注記していないが、近似する偈が Mbh にある (Mbh 5.70.24)。
ye dhanād apakarṣanti naram svabalam āśritāḥ /
te dharmam artham kāmam ca pramathnanti naraṃ ca tam //
自らの力に頼り、ひとの財を奪い取る者たちは、

法と実利と愛欲（という人生の三大目的）を打ち壊し、人間を破滅させる。

- 13) *Raghu Vira* は偈を「ひとの財を盗んだ者は、その代償として人生の三大目的を失う」という意味で英訳しているが、引用偈と古ジャワ解説だけからこのような解釈は不可能であろう。おそらく上の注で示した *Mbh* 偈に依拠した理解である。

- 14) *Mbh* 12.251.14cd-15ab が本偈とほぼ一致する。

*na kim cit kasya cit kurvan nirbhayah śucir āvaset /
sarvataḥ śaṅkate steno mṛgo grāmam iveyivān //*

前半は趣旨は同じだが言い回しが大いに異なる。後半は本偈にほぼ一致し、本偈と同じ *śaṅkitaḥ* という読みをとる写本も一部にはある（マラヤラム版）ようだが、*ivāgataḥ* と同一または類似する異読はない。

- 15) 辞書（Zoetmulder 1982, OJED）の引用例（s.v. *kwan*, p. 946）に準じて、校訂の読みを修正、接続辞 *n* を分かち書きにする。

- 16) *Mahābhārata* などサンスクリット文献には用いられているが、OJED には登録のない複合語。ここでは解説者がサンスクリットの素養をもとに、偈の *sarvataḥ śaṅkitaḥ* を簡潔に表現していると思われる。

- 17) *Mbh* 3.198.89 (=13.121.10) がほぼ一致する。

*trīṇy eva tu padāny āhuḥ satām vṛttam anuttamam /
na druhyec caiva dadyāc ca satyaṃ caiva sadā vadet //
dhana*（財）ではなく *pada*（境地）とするが、3項目の内容は同じである。

- 18) *abhiṅdruḥ-* (“to hate, seek to injure”) の分詞（具格）のようだが、この語形のままでは文法からも文脈からも解釈が不可能。古ジャワ解説にも言及がないので、解説者が参照した時点で偈のこの箇所がすでに転訛していた可能性が高い。サンスクリット文献に類例が見当たらない。

- 19) *Mbh* 13.107.20 の *abc* は本偈と同一だが、*d* は全く異なっている。

*paradārā na gantavyāḥ sarvavarṇeṣu karhi cit /
na hīdṛśam anāyuṣyaṃ loke kim cana vidyate /
yādṛśam puruṣasyeha paradāropasevanam //*

本偈の *d* はこの偈の *f* に対応しているとみられる。また上の偈の *c-f* は *Manu* 法典4.134と一致する。

- 20) *Raghu Vira* は言及していないが、*Manu* 法典9.41が本偈に類似する。

*tat prājñena vinītena jñānavijñānavedinā /
āyuṣkāmena vaptavyam na jātu parayositi //*

これは「男は種、女は畑」という脈絡で男女のあり方を説く箇所に含まれており、「～の男は）決して人妻に種を蒔いてはならない」という言い回しが特徴的である。

- 21) *lamba-lambān* は *lambā* (“half-hearted, incomplet”) からの派生で、「中途半端な気持ちの、怠けている（完全な集中を欠いた）」という意味。

- 22) *Mbh* 13.13.6が概ね一致する。

*tasmād vākkāyamanasā nācared aśubham naraḥ /
śubhāśubhāny ācaran hi tasya tasyāśnute phalam //*

- 23) *Mbh* 3.281.34は *d* のみ大きく異なっているが、他はほぼ一致する。

*adrohaḥ sarvabhūteṣu karmanā manasā girā /
anugrahaś ca dānaṃ ca satām dharmah sanātanaḥ //*

ここでは、*d* で「それが善き人々にとっての永遠の真理である」と述べている。

- 24) 古ジャワ解説が *śīla* という語を用いてパラフレーズしていることから、解説者が参照したサンスクリット偈が、Mbh のような *satām...* という読みではなかったことが明らかである。
 25) Mbh 12.124.60 は b と c で読みが一部異なるが、他はほぼ一致する。

dharmah satyaṃ tathā vṛttaṃ balaṃ caiva tathā hy aham /
śīlamūlā mahāprājña sadā nāsty atra saṃśayaḥ //

ここでは、c は「優れて賢明なる者よ、これらは常に正しい行いを根本とする」と述べている。c で本偈のように *mahārāja* とする異読が一部にはあるが、*śīlamūlā* と読む写本はないようである。

- 26) *vṛtta* には種々の意味があるが、ここでは文脈から“virtuous conduct”という解釈をとる。
 27) *maryāda* は“conduct, behaviour”, *ayukuti* は“proper, correct”という意味。多様な意味合いを含む偈の *vṛtta* に対し、古ジャワ解説者が文脈に沿った最適な解釈をしているのがみてとれる。
 28) 古ジャワ解説から、Mbh の偈（注25参照）c にある *śīlamūla* をふまえていると読み取れる。テキスト校訂者 *Raghu Vira* は注記で、*niścayena* という読みが“intruder”（あとから入り込んだ？）と指摘する。この解釈にたてば、写本伝承の過程で、サンスクリットの読みが崩れ、古ジャワ解説にある *kinaniścayan* をもとに、*niścayena* という読みを推定したということもあり得るか。次の第165偈でも、類例の Mbh 偈にはない *niścita-* が用いられ、その古ジャワ解説にも同語幹の派生形が現れている点が注目される。
 29) Mbh 12.124.15 が本偈にほぼ一致する（下線部が本偈との相違）。

śīlena hi trayo lokāḥ śakyā jetuṃ na saṃśayaḥ /
na hi kiṃ cid asādhyam vai loke śīlavatām bhavet //

- 30) *śīla* 自体「正しい行為」という意味合いだが、それを直後の *yukti* (“suitable, proper, correct”) が修飾している。表記の通例に従い、校訂テキストを修正し、二語を分かち書きにする。

- 31) Mbh 5.34.46 は、d がかなり異なるが他は一致する。

īlaṃ pradhānaṃ puruṣe tad yasyeha praṇaśyati /
na tasya jīvitenaṛtho na dhanena na bandhubhiḥ //

ここでは、同じ具格で *jīva* に並べて *dhana* と *bandhu* を配し、「(~ならばその人の) 生命にも、財産にも、親族にも、何の意味もない」とする。

Indische Sprüche (IS) 6476 は、この Mbh 偈と同一である。*Raghu Vira* は他では IS 収録の偈について注記するものの、本偈に関しては言及していない。

- 32) 前例（注30）と同様に、校訂テキストの *śīlayukti* を分かち書きに修正。
 33) 古ジャワ語解説で、生命のほかに2つ列挙して、*śīla* がなければ無意味と述べる点からすると、偈の d は Mbh や IS より近い読みが本来であったことを窺わせる。ただし3つ目の項目は Mbh などとは異なっている。

- 34) Mbh 13.48.47 は *sadvṛtta* と *dharmajña* の順が異なる点を除き、ほぼ一致する。

jyāyāṃsam api śīlena vihīnaṃ naiva pūjayet /
api śūdraṃ tu sadvṛttam dharmajñam abhipūjayet //

Devanagari 写本2つが、本偈のように *dharmajña-* を先、*sadvṛtta-* を後に置いている。また同じ Devanagari 写本の1つが、本偈と同じく、*abhi-* でなく *api* としている。

- 35) サンスクリット偈では、比較基準対象に言及していないが、古ジャワ解説者は、シェードラの対比から、明確で具体的な階層の名称を用いたと推測される。
 36) サンスクリット由来語幹の語を、同義の現地語幹で言い換えているのみ。

- 37) Mbh 5.34.37がほぼ一致する（下線部が相違）。

satvena rakṣyate dharmo vidyā yogena rakṣyate /
mṛjāyā rakṣyate rūpaṃ kulam vṛttena rakṣyate //

dでvṛtta-でなくśīla-を用いる異読がDevanagari写本の1つにある。ここまでの偈や解説ではvṛttaとśīlaがほぼ同義で用いられており、別個の徳目のように両方が用いられていることには違和感をおぼえる。ただし古ジャワ解説は、dharmaにはvṛtta、kulaにはśīlaと、本偈の読みをふまえていることが明白で、解説者が参照した偈は現行テキストのような表現になっていたと推定される。

- 38) 校訂テキストのjñāna papagēhを修正。

- 39) サンスクリット偈のyogaを単にヨーガ（学派の学問）と解釈せずに、ekatānaつまり心の集中というヨーガ本来の意味に捉えている点が注目される。本テキストSārasamuccayaには、後（第415偈解説）にヨーガストラをふまえた次のような表現も見つかる。

yoga nāranya cittavṛttinirodha / kahrētan in manah
（ヨーガとは心の作用を止めること、心を制御することである。）

- 40) kulī na yo naraḥの部分は校訂者Raghu Viraですら疑問符をつけて手つかずであり、解説・解釈は不可能である。

- 41) Mbh 13.48.48がほぼ一致する（下線部が相違）。

ātmānam ākhyāti hi karmabhir naraḥ svaśīlacāritrakṛtaiḥ śubhāśubhaiḥ /
pranaṣtam apy ātmakulam tathā naraḥ punaḥ prakāśaṃ kurute svakkarmabhiḥ //

校訂版の異読に本偈に類するものは見当たらない。

- 42) Mbh 13.23.12はcの一部の語順が前後するのみでほとんど一致する。

sarve ca vedāḥ saha ṣaḍbhir aṅgaiḥ; sāmkyam purāṇam ca kule ca janma /
naitāni sarvāni gatir bhavanti; śīlavapyetasya narasya rājan //

- 43) 古ジャワ解説では、サンスクリット偈のṣaḍaṅgaに加えてupāṅgaにも言及するが、他の古ジャワ文献での用例は未見。古典インド世界ではVedaの補助学は、śikṣā（音声学）、kalpa（祭祀）、vyākaraṇa（文法学）、nirukta（語源学）、chandas（韻律学）、jyotiṣa（天文学）の六つとされる。また、upāṅgaとしては通例、プラーナ、ニヤーヤ、ミーマンサー、ダルマシャーストラの四つが挙げられる。古ジャワ解説者がupāṅgaの詳細にまで理解が及んでいたかは不詳である。

- 44) Raghu Viraはśīle naと表記しているが、文意からすると、切らずにśīlenaという一語だと解釈するほうがよい。次注のMbhの偈も参照。

- 45) Mbh 12.275.15がほぼ一致する（下線部が相違）。

na bāndhavā na ca vittaṃ na kaulī na ca śrutam na ca mantrā na vīryam /
duḥkhāt trātuṃ sarva evotsahante paratra śīlena tu yānti śāntim //

ここではvidyā（学問）に代えkaulī（出自のよい妻）を挙げている。また、dでは「来世では正しい行いにより寂靜な世界に赴く」と述べている。

- 46) maḍḍemはpaḍḍemの派生形と解釈する。OJEDにはmaḍḍem（-um-派生形）の登録はないが、apaḍḍem（aN-）が“to extinguish, put hout, suppress”として載っており（OJED, p. 1406）文脈に合う。

- 47) Raghu Viraは注記していないが、Mbh 5.39.15が本偈とほぼ同一である（下線部が相違）。

yo jñātim anugṛhṇāti daridraṃ dīnam āturam /
sa putrapaśubhir vṛddhiṃ yaśaś cāvayam aśnute //

ここでは布施の対象が世間一般の人（loka）ではなく、親族（jñāti）となっている。

- 48) OJED には bodha (“knowledge”), bodhi (“illumination, enlightenment”), sambodhana (“information, instruction”) は登録されているが、bodhana は見出し語も他の用例もみつからない。サンスクリット語の √budh 由来には間違いなく、Raghu Vira も bodhayati とサンスクリット訳を添えているが、bodhana という語が古ジャワ文献では特異であるだけに、布施の文脈で「目覚めさせること」(覚醒、啓蒙)を喜びとすると補足解説するのは不自然な印象を与える。
- 49) Mbh 13.58.10がほぼ一致する (下線部が相違)。
 amitram api ced dīnaṃ śaraṇaiṣiṇaṃ āgatam /
 vyasane yo ‘nugrṇhāti sa vai puruṣasattamaḥ //
- 50) 本偈では単に puruṣa としているが、Mbh と古ジャワ解説で puruṣasattama としていることから、本テキストでも本来は puruṣasattama としていた可能性もある。他方、puruṣa 自体、何も形容せずとも大人物を意味することもあるので、解説中でわかりやすく補っただけかもしれない。
- 51) 古ジャワ語でも puruṣa は「真の男、英雄、優れた人」という意味ももつとされる (OJED, p. 1457)。この解説では、puruṣasattama というサンスクリット由来語を、別のサンスクリット由来語 sajjana (よき人) で言い換え、さらに古ジャワ語で wiśeṣa niñ wwañ (傑出した人) とパラフレーズしているのが注目される。
- 52) Mbh 3.297.45が本偈と完全に一致する。
- 53) OJED (s.v. mami II, p. 1095) では、ここの一例のみ挙げて “physician?” と疑問符付きで訳を示している。偈と照らし合わせれば、ここでは医者という意味で用いられているとするのが自然である。
- 54) Mbh 12.287.37が本偈と完全に一致する。
- 55) pathyodana の意味 (“provender for a journey”) から判断し、布施 dāna との複合語を bahuvrīhi と解釈して訳しておく。
- 56) 古ジャワ解説は、布施という行為の徳が親などに向けられる (例えば亡くなった親への供養) のではなく自分に反映されるということを、サンスクリット偈の詩的な言い回しを踏襲せず直截的に伝えている。
- 57) Mbh 12.156.13 (= MSS 2429) は d 以外は本偈と一致する。
 amātsaryaṃ budhāḥ prāhur dānaṃ dharme ca saṃyamam /
 avasthitena nityaṃ ca satyenāmatsarī bhavet /
 Mbh 校訂版には、本テキスト d に類する異読は示されていない。
- 58) サンスクリット偈の tyāga を引いて tyāgadāna という複合語を使い、欲を離れてすべてを施し与える行為を指していると思われる。サンスクリットの tyāga 自体、“abandoning, giving up, renouncing” から派生して “gift, donation” をも意味するが、サンスクリット文献で tyāgadāna という複合語の用例は一般的ではない。古ジャワ語では OJED に見出し語として掲載されているものの、本例の引用のみが示されている。本テキストでは次の第177偈解説にも引き続き取り上げられている。
- 59) Mbh 13.149.11 (= MSS 6284) が本偈と完全に一致する。
- 60) 布施の功德について、サンスクリット偈でも、古ジャワ解説後半でも、現世のことで取り上げているのにもかかわらず、ここで来世 (paraloka) の幸に言及するのは文脈から逸脱している感もある。
- 61) Raghu Vira の注記にはないが、Mbh 3.245.27がほぼ一致する (下線部が本偈との相違)。
dānān na duṣkarataram prthivyām asti kimcana /

arthe hi mahatī tṛṣṇā sa ca duhkkena labhyate //

ここでは、「三界」ではなく「この世」でとしている。校訂版注記によれば、本偈のように *duhkkena* でなく *kṛcchrena* とする異読が *Devanagari* 写本の一つにある。

62) *Mbh* 12.105.9が本偈とほぼ完全に一致する。

duṣkaram bata kurvanti mahato 'rthāṃs tyajanti ye /
vayaṃ tv enān parityaktum asato 'pi na śaknumaḥ //

63) 一般的な表記法に従ってハイフンでつなく。意味は “to yearn for, think of constantly, dream of” (*OJED*, s.v. ayam, p. 176)。

64) *Raghu Vira* の注記にはないが、*MSS* 2931が本偈と同一である。

65) 校訂テキストでは *Devanāgarī* 文字で *ankvaṇuṅjar* と連ねて表記されているが、意味をとって分かち書きする。*OJED* の引用例も参照 (s.v. kwa I, p. 945)。

66) サンスクリット偈では「布施をしない」(na dadāti) としているのに、古ジャワ解説では否定辞がなく、このままでは文意が通らない。

67) *IS* 3063と *Hitopadeśa* 1.45 (Johnson ed., p. 14) は本偈と完全に一致する。

68) サンスクリット偈との対応からすれば *kaparārthan* が想定されるが、*Raghu Vira* はこの読みがいくつかの写本にあるにもかかわらず、*kaparamārthan* の方を採用している。

69) 前注と同じ。*OJED* 中の引用例 (s.v. lēhēn, p. 1002) では *kaparārthan* としていることが注目される。

70) 古ジャワ語の *lēhēn* (“the better thing, the best thing, preferable”) が偈中の *vara-* の意味合い(選択肢中の最適)を的確に伝えている。

71) 校訂版の異読で *Mbh* 13.121.22の後につづく一節中の次の偈が、本偈との関連を示している。

nityam cākrapano bhuṅkte svajanair dehi yācitah /
bhāgyakṣayeṇa kṣīyante nopabhogena saṃcayāḥ //

ab は「常に惜しむことなく享受し、一族の者に請われれば与えよ」と言い回しは異なるものの、主旨は相応する。

72) *Raghu Vira* は *Mbh* 5.39.51が本偈と相応すると注記しているが、本偈の *b* と *d* が入れ替わった形をとる。*MSS* 211はこの *Mbh* の偈と同一である。他方、*Mbh* にはさらに本偈に近似する偈が第2巻に含まれているが (*Mbh* 2.5.101)、*RV* は言及していない。

agnihotrāphalā vedā dattabhuktāphalaṃ dhanam /
ratiputrāphalā dārāḥ śīlavṛttāphalaṃ śrutam //

73) *Raghu Vira* の校訂では *dadyan iñ āliṅganādi krīḍā* となっているが、語義や文意をふまえて分かち書きを修正。

74) *Raghu Vira* は *ajin* とするが、通例に従い、接続辞 *n* を分離して表記する。

75) *kawarah* は語形からも文意からも明らかに *warah* (“instruction, teaching”) の派生語だが、*OJED* にこの *ka-* 派生形は登録されておらず、他の文献の用例も見当たらない。

76) *Mbh* 12.309.9は本偈と完全に一致する。

77) サンスクリット偈の *ātman* を、古ジャワ解説では *buddhi* と *kaprajñān* としてパラフレーズしていることが注目される。

78) *Raghu Vira* は *IS* 5372との相応を注記するが、*a* と *b* の一部の言い回しが異なる。

yasya dharmavihīnāni dināny āyanti yānti ca /
sa lohakārabhastreva śvasann api na jīvati //

IS と同一の偈が *Padmapurāna* (6.59.23) と *Nāradapurāna* (1.4.18) にも含まれる。

79) *Raghu Vira* は *pañḍewēsi* と一語に表記するが、意味をとって分かち書きに修正。

- 80) 否定辞も用いられず疑問文にもなっていないが、文脈から「死体に等しい」ということは明らかなので、補って訳しておく。
- 81) Mbh 12.237.26は本偈と完全に一致する。
- 82) Mbhの英訳者Ganguliは偈のサンスクリット注に従って *tīkṣṇām tanuṃ* を “the religion of injury, i.e. the religion of sacrifices and acts” とする。ここでは文字通りに訳出しておくが、どうしても他の命を害してしまうことを自らの鋭利な体に喩えているという解釈にもとづく。
- 83) サンスクリット語大辞典の一つ *Śabdakalpadruma* の *aruṇodayasaptamī* という見出し下の解説中に、本偈に相応する偈を含む次のような記述がある (Radhakantadeva 1988, vol. 1, p. 96)。
- deśakālāśramakṣetradvayadātṛmanogunāḥ /*
sukṛśasyāpi dānasya phalātīsayahetavaḥ // ... iti brahmapurāṇoktavac ca
- 下線部以外は本偈とほぼ一致する。この偈は *Brahmapurāṇa* にあるというが、刊本にも電子テキストにも、またほかのプラーナ文献にも、今のところ見つからない。
- 84) *āgama* が布施とどう関連するのか解釈がむずかしい。*āśrama* という読みであれば、四住期の(いつに布施をするかという)ことか。
- 85) 本偈の *sukṛta-* よりも *Śabdakalpadruma* が引用する偈の読み *sukṛśa-* (ほんの少し)のほうがいいが、*phalātīsayā* との対比がよくできている。
- 86) Mbh 5.33.51ab は、二者を称揚するという表現の枠組みは似通っているものの、天上に上るという箇所が異なるほか、*c* で言及する二者が全く別のものになっている。
- dvāv imau puruṣavyāghra parapatrayayakārinau /*
striyah kāmītakāminyo lokah pūjītapūjakah //
- また、校訂版には含まれない異読中に、後半のみ完全一致する偈がある (Mbh 5.90.1の後)。
- hrdayam śāstrasamkīrnam dehī me madhusūdana /*
durbhikṣe cānnadātāhaṃ subhikṣe ca hiraṇyadaḥ //
- 87) Raghu Vira の注記にはないが、本偈ともっとも近いのが MSS 2682 である。
- ayane viṣuve caiva ṣaḍaśītimukheṣu ca /*
candrasūryoparāge ca dattam akṣayam aśnute //
- また、次の2つのプラーナに、本偈とほぼ同様な太陽の位置に言及している偈が含まれる。
- ayane viṣuve cāpi ṣaḍaśītimukheṣu vā /*
viṣṇupadyām ca ye dadyur mahādānāni suvratāḥ // (Skandapurāṇa 9.66)
pūjayitvā viśeṣeṇa sarvapāpaiḥ pramucyate /
viṣuveṣūparāgeṣu ṣaḍaśītimukheṣu ca // (Brahmapurāṇa 29.52)
- 88) *ṣaḍaśītimukha* とは Monier-Williams の辞書によれば、太陽がうお座、ふたご座、乙女座、いて座の4つに入ったときのことを指す。ただし、なぜ「86」なのかは審らかではない。
- 89) 偈中のサンスクリット語を引用して *nāranya* (～といわれる) を付しただけで、何も解釈や補足説明を加えないのは、本テキストの古ジャワ解説ではきわめて稀である。往時に古ジャワ世界で入手できる情報ではこの天文学関連の知識を適切に処理できなかったか。
- 90) Mbh 12.282.16が本偈とほぼ一致する (下線部が相違)。
- prāṇasamtāpanīrdistāḥ kākīnyo 'pi mahāphalāḥ /*
nyāyenopārjitā dattāḥ kim utānyāḥ sahasraśaḥ //
- 校訂版注記によれば、Devanagari 版の2つの写本が、*anyāyoparjitā* や *na parārthāḥ* という本偈に近似する読みを含んでいる。
- 91) OJED は *wēlēkaṇ* の意味を “thirsty (or hungry?)” としているが、ここでは “hungry” のほうが

- 文脈に合う。
- 92) サンスクリット偈の *parārtha-* を *paramārtha-* で解説している点が注目される。第181偈の解説でも同様である。注68参照。
- 93) *Mbh* 12.71.6は *a* で *dadyān* のかわりに *brūyān* としている以外は同じ。*Raghu Vira* は言及していないが、*MSS* 2978がこの *Mbh* 偈と同一である。
- arthān brūyān na cāsatsu guṇān brūyān na cātmanah /*
ādadyān na ca sādhubhyo nāsatpuruṣam āśrayet //
- 94) 古ジャワ語の解説ではサンスクリット偈の *sādhu* に否定辞を冠している (*tan sādhu*) が、*sādhu* を同じ意味で捉えると意味が通じない。偈では苦行林で修行する無一物の聖者を指している一方、解説の方では、ほかの *sajjana* と同じく、単に善人という意味だろうと解釈しておく。
- 95) *Mbh* 13.122.10は本偈と完全に一致する。
- 96) 校訂テキストの *hiṇānyan* を、*OJED* の見出し語や用例の表記 (*s.v. hiṇān*, p. 631) にしたがって修正。
- 97) *Raghu Vira* は指摘していないが、*Mbh*13.24.50は *caritra* と *cāritra* の相違のみで他は完全に一致する。
- 98) *Mbh*12.37.29は、*sīla-* と *hāsaka-* の格表現が偈と異なるが、そのほかは一致する。
- na dadyād yaśase dānaṃ na bhayān nopakāriṇe /*
na nṛttagītaśilesu hāsakesu ca dhārmikah //
- 99) サンスクリット偈では名詞の格によって意味合いを表しているところを、古ジャワ解説では言葉を補って的確かつ明快に解釈している点が注目される。目的を表す為格は *maprayojana* ~ (~という目的をもって)、理由をあらわす奪格は *de niṅ* ~ (~から)、そして贈与対象をあらわす為格は *riṅ* ~ (~に) とわかりやすい。
- 100) *Raghu Vira* は *Mbh* 2.5.81と同83が本偈に相応すると注記するが、校訂版テキストに類例は見つからない。そのかわり、マヌ法典中の一偈 (2.227) がほぼ一致することが新たにわかった。
- yaṃ mātāpitarau kleśaṃ sahetu sambhave nṛnām /*
na tasya niṣkṛtiḥ śakyā kartuṃ varṣasatair api //
- bの表現が異なり、マヌ法典では懐胎よりも誕生・出産の苦痛を取り上げている。
- 101) *Hitopadeśa* 1.15は *bhaja* と *bhara* の相違のみ (文中の意味は同じ) でほぼ同一。
- daridrān bhara kaunteya mā prayaccheśvare dhanam /*
vyādhitasyausadhaṃ pathyaṃ nīrujasya kim auśadhaiḥ //
- IS* 2714もほぼ同一 (*bhaja* を *bhara*、*nīrujasya* を *nīrujas tu* と読む以外)。
- 102) *Raghu Vira* は他写本の *daridrā* という読みを注記しつつも、校訂テキストでは *daridraha* としている。他に見られない派生形だが、非現実相 (*arealis*) の *-a* が付されているという解釈か。あるいは、本来は *ya* または *ta* という強勢辞だったという解釈も可能かもしれない。
- 103) *MSS* 2723は *niyantavya* を *nimantraya* とする以外は本偈と一致する。また、*Mbh* 13.59.6は *nimantraya* とするほか、*ayācate* でなく *yācate* とし、前半と後半が本偈と入れ変わっている。
- 104) *OJED* の見出し語と引用例 (*s.v. ānṛśānsa*, p. 82) に準拠して、校訂テキストの *syānṛśānsa* の *sy* を分かち書きにし、*a* を長音表記にする。
- 105) サンスクリット偈の方は、第193–194偈で提示された「貧しくて乞い求める者に布施を」という主張をさらに展開し、「求め出すらこない貧しい者にこそ」という論調がうかがえる。これに対し、古ジャワ解説にはその趣意が必ずしも反映されていない。最後の一文で、

- 求めてくる者への布施 (dāna riñ amalaku) に言及しており、否定辞のついた ayācate ではなく、Mbh や MSS の偈のように yācate という読みをふまえた可能性も考えられる。
- 106) Raghu Vira は IS 3659 を相応偈として注記しているが、Mbh 13.62.13 も IS の偈と同一である。ava√man の語形が異なる以外は一致している。
- nāvamanyed abhigataṃ na praṇudyāt kathaṃ cana /
api śvāpāke śuni vā na dānaṃ vipraṇāsyati //
- 107) Raghu Vira は指摘していないが、MSS 4050 は本偈と完全に一致する。
- 108) 文意から、校訂テキストの分かち書きを修正。OJED の引用例参照 (s.v. buka, p. 269; wai, p. 2249)。

参考文献

- Böhtlingk, Otto
1966 *Indische Sprüche*, 3 vols., Osnabrück (reprint).
- Ganguli, K. M. (tr.)
2002 *The Mahabharata of Krishna-Dwipayana Vyasa*, 3 vols., New Delhi (reprint).
- Gonda, J.
1998 *Sanskrit in Indonesia*, Śata-piṭaka Series, Indo-Asian Literatures, Volume 99, New Delhi (reprint).
- Johnson, F.
2017 *Hitopadeśa, the Sanskrit Text, with a Grammatical Analysis, Alphabetically Arranged*, London (reprint).
- Mandik, V. N. (ed.)
1992 *Mānava-Dharma Śāstra*, 3 vols., New Delhi (reprint).
- Monier-Williams, M.
1982 *A Sanskrit-English Dictionary*, Oxford (reprint).
- Radhakantadeva
1988 *Śabdakalpaduruma*, 5 vols., Delhi (reprint).
- Raghu Vira
1962 *Sāra-samuccaya, a Classical Indonesian compendium of high ideals*, Śata-piṭaka Series, Indo-Asian Literatures, Volume 24, New Delhi.
- Sternbach, Ludwik
1974–2007 *Mahā-subhāṣita-saṃgraha: being an extensive collection of wise sayings in Sanskrit*, vols. 1–8, Hosiapur.
- Sukhtankar, V. S. and S. K. Belvalkar (eds.)
1933–66 *The Mahābhārata, for the first time critically edited*, 19 vols., Poona.
- Vyasa
2007 *Padmapurāṇam*, Chowkhamba Sanskrit Series 124, 6 vols., Varanasi (reprint).
2014 *Skandamahāpurāṇam*, Chowkhamba Sanskrit Series 156, 7 vols., Varanasi (reprint).
- Zoetmulder, P. J.
1982 *Old Javanese-English Dictionary*, 2 vols., 's-Gravenhage.
- 安藤 充
2018 古ジャワ金言集 *Sārasamuccaya* 訳注研究(1) 『人間文化』(愛知学院大学人間文化研究

所紀要) 第33號, pp. 117–137.

2019 古ジャワ金言集 *Sārasamuccaya* 訳注研究(2) 『人間文化』(愛知学院大学人間文化研究所紀要) 第34號, pp. 141–167.

2020 古ジャワ金言集 *Sārasamuccaya* 訳注研究(3) 『人間文化』(愛知学院大学人間文化研究所紀要) 第35號, pp. 159–183.

2021 古ジャワ金言集 *Sārasamuccaya* 訳注研究(4) 『人間文化』(愛知学院大学人間文化研究所紀要) 第36號, pp. 141–167.

渡瀬 信之 (訳)

1991 『マヌ法典』 中公文庫.

【電子情報】

Brahmapurāṇa

http://gretil.sub.uni-goettingen.de/gretil/corpustei/transformations/html/sa_brahmapurANa-1-246.htm

Hitopadeśa

http://gretil.sub.uni-goettingen.de/gretil/corpustei/transformations/html/sa_nArAyaNa-hitopadeza.htm

Mahābhārata

<http://gretil.sub.uni-goettingen.de/gretil.html#MBh>

Mahāsubhāṣitasamgraha, verses 1–9979

https://people.math.osu.edu/rao.3/utf/msubhs_u.htm

Nāradapurāṇa

http://gretil.sub.uni-goettingen.de/gretil/corpustei/transformations/html/sa_nAradapurANa.htm